認知症の私と輝く大賞

Ninchisyo Kagayaku Taisy

2016

平成27年度老人保健事業推進費等補助金

認知症の人の視点に立って
認知症への社会の理解を深めるための
普及啓発に関する調査研究事業

「認知症の私と輝く大賞」とは

認知症の人が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けていけるようにするための取り組みが全国で展開されています。家族や身近な人たち、近隣で暮らす住人、さらに日常生活のさまざまな場面で接するサービスや機関が、どのようにすれば認知症の人がそれまでの生活を続けられるのか、ご本人や家族などと一緒に、そのヒントを探しながら実践例を積み重ねています。

一方で、将来、自分が認知症になったとき、自分の家族や友人・知人が認知症を発症した場合に、どうすればこれまでの生活を続けていくことができるのか、暮らし続けてきた地域で、どのような問題に直面していくのかといった疑問や不安をぬぐいさることは容易ではありません。また、すでに疑問や不安に直面していても、その解決方法が見つからず、苦悩している方も少ないと思われます。

そこで、私たち（平成 27 年度老健事業「認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解を深めるための普及啓発に関する調査研究事業」検討会議）は、認知症の人が暮らす社会を構築していくための新たなアイディアを社会で共有し、新たな活動を醸成するための仕掛けを創出することを目的に、そのヒントとなる事例を収集し、「認知症の私と輝く大賞」として社会に情報発信させていただくことといたしました。

この「認知症の私と輝く大賞」の選定・表彰が、認知症に対する理解を深め、さらに認知症の人にやさしい地域づくりのきっかけとなれば幸いです。

「認知症の私と輝く大賞 2016」事例一覧

FILE No.1 ［岩手県紫波郡矢巾町］
わんわんパトロール隊と矢巾町の皆さん …… 4

FILE No.2 ［宮城県仙台市］
丹野智文さんとパートナーの皆さん …… 6

FILE No.3 ［東京都町田市］
DAYS BLG! **と町田市認知症と共に歩む人 本人会議の皆さん** …… 8

FILE No.4 ［愛知県田原市］
田原市図書館 元気はいたつ便の皆さん …… 10

FILE No.5 ［奈良県追分地区］
SPS **きずなやの皆さん** …… 12

編集＋デザイン●株式会社harunosora

「他人ごと」から「自分ごと」、そして「地域ごと」へ

わんわんパトロール隊と矢巾町の皆さん

岩手県紫波郡矢巾町 Yahaba-cho

FILE No. 1

連絡会の発足

岩手県の中心部に位置する小さな町、矢巾町（やはばちょう）。人口は27,035人（2015年現在）。うち、高齢者は23.6%を占めます。

認知症の人の割合が徐々に増え、10年ほど前、町内に地域包括支援センターができてからも、長らく行政としては認知症の問題は「他人ごと」でした。ただ、時が経つにつれ、行政窓口には認知症に関する相談が相次ぐようになります。そして、現場職員らの粘り強い情報提供もあって、ようやく行政レベルにおいて認知症を「自分ごと」として受け止めるようになってきました。

こうした背景の下、医療機関・介護事業所など、地域の支援機関間の連携支援や認知症の人とその家族などへの相談支援を行う認知症地域支援推進員が中心となり、官民協働による「やさしさはばたく認知症支援ネットワーク連絡会」が結成されます。2013年のことです。

連絡会は、民生委員、商工会、医師会、警察、消防などの関係者によって構成されています。外部委員を含めると総計24名。また、町の現状と課題をふまえ、連絡会には地域住民参画による以下の4つの部会が設置されました。

	部会名	役割
1	医療連携・認知症ケア部会	医療介護連携、人材育成
2	わが町つながる部会	理解促進、普及啓発
3	安心安全おたすけ部会	予防、早期対応、交通安全
4	認知症支援開発部会	家族支援、新しい支援

わんわんパトロール隊

認知症支援開発部会で検討し、具体化した取り組みの1つが「わんわんパトロール隊」です。

道に迷ったり行方不明になったりするお年寄りをサポートするには、住民の参加が不可欠ということから生まれたものです。具体的には、犬を散歩させている住民（隊員）が、道すがら困っている人を見つけたときに地域包括支援センターへ連絡するというもの。認知症のお年寄りに関する情報（同意が得られているもの）は、あらかじめ隊員に伝えられています。

これまで地域包括支援センターあるいは警察に連絡し、お年寄りを保護できた例もあります。いうまでもなく、地域住民があまり負担感をもつことなく、日常の散歩中に見守り支援を行えるというのが、この活動が奏功しているポイントです。

現在、隊員は25名。入隊するには認知症サポーター養成講座および勉強会（年1回）の受講が求められます。

介護戦隊やはばジューミンジャー's

認知症の啓発役として「介護戦隊やはばジューミンジャー's」というご当地ヒーローも考案しました。

住民の認知症に対する関心やサポート意識を高めることをねらいとして、地域密着型サービス事業所の職員がボランティアとして行っている活動です。

小学生向けに開催される認知症サポーター養成講座では、前座として登場したり、町内外の各種イベントに参加したりします。今や人気者となり、啓発に一役かっています。

ひなたカフェ

ひなたカフェの愛称でよばれる認知症カフェは、町民センター食堂でひと月に1回オープンしています。障害者の福祉的就労とジョイントするとともに、地域包括支援センター職員ならびに民生委員の3名ほどがサポーターを担っています。

わんわんパトロール隊の隊員が声をかける。
トレードマークは、骨の形をしたステッカー（反射板）。

認知症地域支援推進員の鱒沢陽香さん。ひなたカフェにて。

ご当地ヒーロー「ジューミンジャー's」。小学生たちも大喜び。

現在、約10名の認知症当事者、家族などが参加しています。ときには、学生や介護事業所の利用者も訪れます。ここでは決まったプログラムがあるわけではありません。情報交換や息抜きの場として存在価値を高めています。

課題を「地域ごと」へ

その他、種々の取り組みも始まっています。具体的には、「認知症ケアパス（矢巾モデル）の作成・普及」「多職種の情報共有ノートの作成」「認知症キャラバン・メイト連絡会の結成」「地域資源マップの作成」などです。

いずれにしても、矢巾町のこうした一連の取り組みは、行政や専門職だけで認知症の人の生活を支えようとするのではなく、住民や関係機関が自主的に連絡会を組織し、地域の課題を明らかにし、自らできることを試みているという点で、他の地域でも参考になることでしょう。それは、まさに「他人ごと」から「自分ごと」、そして「地域ごと」へと昇華していく過程に他なりません。

当事者が語り合い、希望を見いだし、新たな一歩を踏み出す場「おれんじドア」

丹野智文さんとパートナーの皆さん

宮城県仙台市 Sendai-shi

FILE No. 2

39歳で認知症と診断されて

丹野智文さん、41 歳。自動車販売の会社に勤めていましたが、仕事上必要なことを少しずつ忘れるようになったのが最初の異変でした。メモした付せんをパソコンの周りに貼っていましたが、それがいつの間にか付せんだらけになってノートに書くようになりました。徐々に仕事での勘違いやミスが増えてきて、毎日一緒に働いている社員の顔がわからなくなることもありました。

39 歳のときに大学病院で受けた診断は「若年性アルツハイマー病」。病気がどのように進行していくのか、仕事は続けられるのか、この先の生活はどうなっていくのか……。心の中は大きな不安と葛藤でいっぱいでした。

医師から、検査結果や認知症という病気について、進行を遅らせる治療薬などに関して何度も詳しい説明を受けるものの、インターネットで調べれば調べるほど不安な情報ばかりが目に入る。夜になると病気のことばかり考え、眠れなくなることもしばしばありました。

自分が家族を支えていかなければいけないにもかかわらず、認知症になったことで、妻や子どもたち、両親に心配をかけることがもっとも辛かったという丹野さん。とりわけ、子どもたちにとって、父親が認知症であることが学校や友だちに伝わった場合、どのような状況になるのだろうかと悩んだといいます。

出会いをきっかけに……

そうしたなか、認知症の人と家族の会・宮城県支部の存在を知ります。若年者の集いもあると聞いて、丹野さんは参加することを決意しました。参加をしてみると、同じ薬を服用している人に親近感をもったり、互いに悩みを打ち明け合ったりと、そこで話をするのが楽しみとなりました。

また、こうした不安と葛藤の日々のなか、広島県に住む認知症の男性 A さんに出会ったことも、自身を前向きにさせる契機となりました。A さんは、ボランティアや趣味を楽しみながら、認知症とともに自分らしくエネルギッシュに生きていて、その姿に強く勇気づけられたのです。

勤めていた会社には、社長に認知症であることを伝えると、幸いなことに「戻ってきなさい」とのこと。結果、18 年携わってきた営業職から事務部門に異動となりましたが、新たな活躍の場ができました。他の社員も暖かく迎えてくれました。

つながる、前向きになる

その後、丹野さんは、認知症の本人や家族の不安に直接耳を傾けるとともに、自分自身の体験や暮らしぶりを伝えることで、他の認知症の人たちに希望や一歩踏み出すきっかけを提供したいと思うようになります。「おれんじドア」の誕生です。

おれんじドアというネーミングには、認知症と告知された人や不安をかかえている人が、気軽にドアを叩いて訪れることができるという意味が込められています。また、ホームページには、丹野さんのメッセージがこう書かれています。「認知症の診断を受けて、これから先、どうなるのだろうと不安で仕方がなかったとき、私を前向きにしてくれたのは、私より先に診断を受け、その不安を乗り越えてきた認知症当事者の方々との出会いでした」。

おれんじドアは、「当事者のためのもの忘れ総合相談窓口」として、訪れた認知症の本人や家族が、気兼ねなく話ができる場です。それぞれが、診断を受けてから現在に至る経緯や今の生活状況、困りごとなどを語り合います。もちろん、希望やこれからやりたいことなども話します。

丹野さんの話にみんな勇気づけられる。
かつて一緒にフォーラムに登壇した佐藤充博さんと。

講演会の打合わせに望む丹野さん。隣は啓発活動のパートナー、若生栄子さん（認知症の人と家族の会・宮城県支部世話人）。

現在、おれんじドアは、ひと月に 1 回開催（第 4 土曜日）。「デイサービスは嫌。興味がわかない」「治らない病気だからこそ、話し合える仲間が大切」「本人と家族との間にも一定の距離がいる」。こうした思いをかかえた認知症の当事者が集まってきます。「決して認知症＝終わりではない」。ここでそう確信し、笑顔を取り戻し、前を向いて歩き始める仲間も多くいます。

認知症と診断を受けたとしても、すぐに介護サービスなどが必要になるわけではありません。そこに至るまでの相談や支援を得られない時期は「空白の期間」といわれます。こうした認知症の当事者の方の空白の期間をサポートすることが、おれんじドアの大きな役割であり、機能といえます。

●●●●●

現在、丹野さんは、これまでの自身の経験やおれんじドアの活動などをふまえ、各地で講演を行っています。そこでは、認知症の人が社会や人とのつながりを維持できる環境づくりがとても大切だと説きます。また、誤解や偏見にあふれている認知症のイメージを変えたいともいいます。それが実現する日を目指し、今日も丹野さんは全国を奔走しています。

自分たちで決める、つくる、社会を変えていく

DAYS BLG!と町田市認知症と共に歩む人 本人会議の皆さん

東京都町田市 Machida-shi

FILE No. 3

やりたいことができるデイサービス

東京都町田市にあるデイサービス「DAYS BLG!」では、毎朝まずその日の活動内容を決める会を開きます。そこではメンバーが、その日にしたいことを自ら提案します。「仕事がしたい」といえば、自動車ディーラーでの洗車などの作業をし、謝礼をもらうこともできます。仕事以外にも散歩やボランティアなど、それぞれが自分の希望する過ごし方をしています。

DAYS BLG! 代表の前田隆行さんがこのようなデイサービスを始めたきっかけは、本人の「働いて対価を得たい」という思いに応えるサービスがないと気づいたことでした。「社会と断絶されたと感じていた人でも、もう一度、社会とつながることで生きがいを取り戻すことができる」と前田さんは語ります。

支援されるのではなく、自分の意思で、人の役に立ちたい――。そんな思いを DAYS BLG！で実現しているメンバーの1人が生川幹雄さん（66歳）です。生川さんは、当事者が自分の思いを地域に伝える「町田市認知症と共に歩む人 本人会議」（以下、本人会議）の発起人も務めます。

当事者同士で意気投合

総合商社に勤めていた生川さんは2014年に退職して早々に、日課である犬の散歩中に突然、自分がどこにいるのかわからなくなるという経験をします。医療機関を受診したところ、診断は認知症でした。これに大きなショックを受けた生川さんは、数か月間、家に引きこもってしまいます。

そんなある日、認知症フレンドシップクラブの松本礼子さんと知り合います。「何か仕事がしたい」という生川さんの希望を聞いた松本さんは、その経歴と能力を鑑み、英文の日本語訳の仕事を依頼しました。その出来はすばらしいものでした。

自信を取り戻した生川さんは、次なる仕事を模索していました。そんな折、高齢者見守り支援を行う「町田市あんしん相談室」に赴きます。そこで、同じ認知症である鈴木克彦さんと出会い、意気投合。

認知症であることをオープンにし、明るく話すようになった2人は、あるとき、認知症サポーター養成講座への参加を依頼されます。これをきっかけに、「支援されるだけでなく、社会貢献がしたい」との志を掲げ、本人会議の立ち上げに動き出します。

やりたいことを自分たちで決める

現在、本人会議のメンバーは6名。週1回（火曜日）、朝10時、メンバーが事務局に集まってきます。お茶を飲みながらおしゃべりを楽しみ、みんなで今日やりたいことを決めます。

ある日は、自身が認知症であることを示す「ヘルプカード」の作成について話し合いが行われました。「カードをたくさん持ってて、いちいち探すのに時間がかかる。バッジのようなものがあるといい」という意見がある一方で、「カードを持ってることがわかると、詐欺のターゲットになってしまうのでは」と話す人もいます。認知症の当事者ならではの視点で熱い議論が交わされます。

自分たちでつくる出張型カフェ

本人会議は、社会や地域に向けた活動を積極的に行っていることも特徴です。具体的には、出張型の認知症カフェや認知症サポーター養成講座への参加などです。

認知症カフェは、自分たちが行きたいカフェの条件は何だろうと話し合って決めました。その条件とは、「地域に貢献できる」「仲間づくりができる」「役に立っている実感を得られる」「世代間交流ができる」「認知症への理解を広げられる」というもの。そして何より、「見守られる場ではなく、自分たちでつくるカフェ」。そんな居場所にしようと意見がまとまりました。

認知症サポーター養成講座の講師として、当事者の思いを語るメンバー。左から鈴木克彦さん、生川幹雄さん、宮田祐二さん。

認知症カフェで活躍するメンバーたち。共に活動するのは、本人会議事務局の松本礼子さん（右から2番目）。

やがて、企画運営も設営も本人たちが中心となってつくる認知症カフェが生まれました。あるときは、商店街のイベントの際、その一角に出張カフェを設置しました。カフェでは、メンバーの鈴木さんが趣味のコーヒーを淹れて振る舞います。また、認知症に関する知識を深めてもらおうと、啓発コーナーも設けました。

本人会議が伝えたいこと

本人会議では地域の人に、自分の経験やメンバーが思っていることを伝える講演活動も行っています。伝えたいのは、「認知症になっても私は私」ということ。「認知症＝絶望」と考えてしまうと、受診を躊躇し、結果として早期発見・早期対処が遅れてしまうからです。こうした講演を聞いたサポーターからは、「テキストには書かれていないことが、ご本人の話から学べる」といった感想も寄せられているといいます。

●●●●●

現在、生川さんが生活の中で特に楽しみにしているのは、児童館での読み聞かせです。オリジナルの紙芝居を使って、子どもたちに認知症のことを教える活動です。読み終えた後に自分が認知症であることをカミングアウトします。そしてこう言います。「おじちゃんの顔と名前を憶えて、もし道で見かけたらあいさつして声をかけてほしい。ホッとするから」と――。

田原市図書館 元気はいたつ便の皆さん

お年寄りに元気を届ける、回想法の出張サービス

愛知県田原市 Tahara-shi

FILE No. 4

高齢者人口がこれほど増加しているにもかかわらず、図書の貸出件数に占める高齢者の割合が低い――。学校や保育園などへのアウトリーチサービスはあるものの、高齢者向けのサービスがない――。愛知県の南、渥美半島にある田原市図書館が「元気はいたつ便」を始めた背景にはそんな実態がありました。最初の試行は2011年度。3つの介護施設を対象に訪問サービスを始め、その後、プログラムの構成などに再考を重ねてきました。

介護施設で回想法を

「元気はいたつ便」は、デイサービスやグループホームなどの介護施設にいるお年寄りへ届けるサービス。訪問サービスと、図書・雑誌・CDなどの団体貸出サービスの2つがあります。

訪問サービスは、さらに、①レクリエーションとミニ回想法（20分程度）を組み合わせたもの、②グループ回想法（45分程度）の2種類に分かれます。前者では、レクリエーションで雰囲気が和んだ後、簡単な回想法を行うというプログラムです。後者のグループ回想法では、図書館職員（通常2名）とサポートを担う市民ボランティアが、施設職員と協力しながら進行します。

2016年1月現在、訪問サービスは13施設、団体貸出サービスは15施設に提供されています。

回想法の取り組みに向けて

回想法を担うことになった図書館職員は、それを学ぶために、初年度から専門家を講師に招いて研修を受けることにしました。また、市の福祉専門学校のオープンカレッジに参加し、認知症の講座を受けたりもしました。当初は「マニュアルどおりにやらなければ……」「戦争の話や亡くなった方の話がでてきたらどう対応しよう」などと不安に思うことも多くありました。

回想法で使用する昔ながらの生活用具などは市の博物館から借り受けることにしました。初年度に選んだ20点ほどについては、その後、毎年、借り受けの更新手続を行っています。

地産のさつまいもやメロン、あるいは草花や木の実など、スタッフが「使えそう」と思ったものを探して持参することもあります。お雛様の段飾りを折り紙で手作りしたこともありました。

サポートを担うボランティアの活躍

元気はいたつ便の大きな力になっているのが市民ボランティアです。初年度は6名でしたが、その後、少しずつ増え、現在は8名の女性（50～70代）が活躍しています。それぞれひと月に1～2回程度参加します。

こうしたボランティアの役割は、図書館職員と協力して回想法やレクリエーションを実施することです。今後、ボランティアにはサポート役としてだけでなく、進行役として活躍してもらうことも考えています。

なお、普段はボランティア全員が一同に集う機会がないため、1年に1～2回、横のつながりをもつために意見交換会を開きます。あるときの意見交換会では、「傾聴ボランティアと回想法のボランティアは違うと感じた」などの感想を話す人がいました。

2013年から実施しているボランティアの養成講座には、回想法講座が含まれているとともに、図書館職員による説明会と現場見学があります。

訪問がもたらした変化

元気はいたつ便に対する評価は高く、施設の利用者や職員からは「いつも楽しみにしています」などと声をかけてもらうことが多くあります。施設職員にとっては、普段自分たちが行うレクリエーションとは異なるプログラムを体験でき、また、それに対するお年寄りの反応から新しい気づきを得たりすることもあるとのことです。

一方、図書館司書の河合さんにも心境の変化がありました。活動に携わり始めた当初は認知症の方の対応に大きな不安を感じていましたが、今では「必要以上に怖いと感じたり不安に思うことはなく、皆さん同じようにお話を伺う」とのこと。河合さんはこうも言います。「回想法で出会う方たちに、昔の知恵や地域の様子など知らないことをたくさん教わりたい」と。

図書館司書と市民ボランティアが一緒にデイサービスなどを回り、「元気はいたつ便」を届ける。

博物館と連携し、回想法で使う民具を調達する。

「地域のお年寄りを回想法で元気にしたい」そう語る図書館司書の河合美奈子さん。

現在、元気はいたつ便の取り組みは、全国各地の図書館などから関心を集めています。2015年度はすでに7件の視察がありました。今後、他の自治体でも同様の取り組みをスタートさせる予定だそうです。

梅林の再興に私たちのチカラを使ってほしい

奈良県奈良市 Nara-shi

SPSきずなやの皆さん

FILE No. 5

梅林の再興に貢献したい

かつて精神障害者の就労支援に携わっていた若野達也さんは、若年性認知症の男性の「居場所づくり」が必要だと考えていました。しかし、実際に当事者の話を聞いてみると、求められているのは、グループホームやデイサービスのような場ではなく、「働ける場」。そこで、若野さんは、若年性認知症の人の課題も解決しながら、地域の困りごとも解決していく活動ができないものかと考えます。そこで創設したのが「SPSきずなや」でした。

近隣には追分梅林がありました。1960 年代に開園し、かつては年間 3 万人が訪れる観光地でした。ところが、近隣に高速道路が建設されたことで地下水の流れが変わってしまい、手間をかけて土地改良をしなければ梅林を維持できない状況。梅林の組合員はみな高齢になり、手入れを行う作業は大きな負担でした。そのため、梅林は 10 年前に休園していました。

そこに目をつけた若野さんは、梅林組合の理事長に「認知症の人が活躍できる農業のテーマパークのようなものを作りながら、地域の再興に貢献したい」と提案してみました。そうしたところ、「やりたいことをやってみたらいい」と 34,000 坪の土地を無償で貸してくれました。

当初、梅林組合の中で若野さんの提案に賛成してくれたのは理事長だけ。梅林に愛着をもつ地域住民の理解を得るには時間がかかりました。最初の 1 年間は掃除に懸命に取り組むとともに、地域の代表が集まる会合などで「観光地づくりのお手伝いをさせてください」とお願いし続けたところ、次第に反対していた人も認めてくれるようになりました。

使命感をもつメンバーたち

現在、梅林の手入れを行う認知症のメンバーは、男性 4 名。それ以外に職員が 2 名。その他にボランティアが 30 ～ 40 人ほどいて、入れ替わり立ち替わり手伝いにやって来ます。近隣の福祉事業所のスタッフやボランティア講座を受けた住民などです。

活動に参加する頻度は、週 1 回から週 2 回。梅林の土地は足元が悪く危険もあるため、作業は職員とマンツーマンで行います。ファームマネージャーである恩塚浩史さんは、日々、メンバーの様子を見て、できそうな作業をお願いするようにしています。作業は、あくまで本人のペースで。恩塚さんは、「嫌な仕事の押し付けになっていないか」と、本人の反応を見過ごさないように配慮していると言います。

なお、メンバーには週 2 回、1 日 2 時間まで時給 800 円の賃金を支払われます。中には、お願いしている作業に「俺がやらなければ！」と使命感をもち、給料以上に働いてくれる方もいます。

居場所を見つけた小谷さん

メンバーの 1 人である小谷勉さん（58 歳）。55 歳のときに若年性認知症と診断されています。家族は奥様と 2 人のお子さん。医師から診断を受けたときは、「目の前がまっ暗になった」と言います。奥様が市役所に相談すると、担当者が紹介してくれたのはきずなやでした。小谷さんは看板製作会社に現在も勤めているものの、「いずれ仕事を辞めたときに行ける場所がほしい」と、休日になると、きずなやに足を運ぶようになりました。

小谷さんは、勤め先の会社で一人前に仕事をできなくなったことに引け目を感じていたようでしたが、きずなやを訪れると「こっちではやりたいことがやれるので楽」と言って微笑みます。

梅林では、新たに土地を開拓するために竹林を切ったり、車いすでも農作業ができるように農道を作ったり、剪定された枝をかき分けて道を作ったりしています。職員以上によく働くと評判です。

週末に追分梅林で働く小谷勉さん。
職員以上に精を出す。

若年性認知症の方が剪定作業に勤しむ追分梅林。
梅が枯れ、廃園してから今年 10 年ぶりに復活する。

認知症の人たちの姿が地域を変える

こうした活動を始めた頃は、多くの住民が認知症の人に対して「怖い」「危険」というイメージを持っていました。しかし、メンバーの方たちが活躍する姿が、こうした誤解や偏見を少しずつなくしていきました。「認知症の人」ではなく「〇〇さん」と呼んでもらえるようになったり、「少しできないことがあるだけで他は何も変わらない」と認識されるようになったり……。

きずなやは、認知症の方たちが自分らしく地域で暮らしつづけていけるよう、社会の環境を変えていこうと考えています。認知症の人の困りごとを減らすことは、地域の高齢者や LGBT や障がい者の人たちなどの困りごとも減らすことにつながります。認知症の人だけの課題解決だけでなく、地域の課題解決に焦点をあて、多くの人たちと努力していけば、結果、認知症の人も安心して暮らしていける町に近づけるものと思われます。

●●●●●

まだまだ数は少ないものの、今年は 70 本の梅が開花する見込みです。2 月末に期間限定の開園を予定しています。当日は豚汁やおにぎりを振る舞ったり、梅ジャムとバウムクーヘンなどの販売も行いたいと張り切っています。

平成27年度老人保健事業推進費等補助金
認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解を
深めるための普及啓発に関する調査研究事業

認知症の私と輝く大賞 2016

2016年2月27日発行

発行●みずほ情報総研株式会社
〒101-8443 東京都千代田区神田錦町2-3
TEL●03-5281-5277　FAX●03-5281-5443